

## 書評と紹介

金東椿著／水野邦彦訳

### 『近代のかけ

——現代韓国社会論』

評者：文京洙

1980年代から世紀の境目に至る20年余りの時期は、韓国の社会思想や現代史（同時代史）認識が反共冷戦体制の枠組みを超えて大きく転換した時代であった。光州事件<sup>(1)</sup>の衝撃を経た80年代には、解放直後の混乱や朝鮮戦争（1950～53）を通じてほとんど根絶やしにされた感のあるマルクス主義の潮流が甦り、さらにすすんで北朝鮮の主体思想に共鳴する民族主義の潮流までもが台頭するに至った。グローバル化と情報通信革命のすすんだ90年代には、一転してポスト・モダンや市民社会論のさまざまな潮流が韓国の思想界を風靡することになる。サッカーW杯や“韓流”を経て韓国の文化や芸能はこの日本でもかつてなく身近なものになったが、そうした韓国の現代思想の息吹にじかに接する機

会は、やはり、まだまだ少ない。

もちろん、李永禧、朴玄埰、姜萬吉、白樂晴、崔章集などの、すでに70年代から活躍していたような、進歩的知識人や研究者の翻訳は日本でも数多く出版されている。だが、肝心の、現代韓国の“いま”を示すような人びと、つまり、80年代以降の激動期に思想形成を果たし、今日の韓国社会で政治、経済、文化の中樞を占め始めているような世代<sup>(2)</sup>の人びとの考え方を知る機会が、依然として、少ないといわざるを得ない。そうした世代の研究者・知識人の著作や共同研究の成果が刊行されるようになったのはこの数年のことではないだろうか。そういうなかで昨年（2005年）、本書とならんで文富軾『失われた記憶を求めて——狂気の時代を考える』（板垣竜太訳、現代企画室）が刊行されたことは、韓国の社会思想の底流を理解するうえできわめて意義深いように思える。ともに1959年生まれの二人は、論述のスタイルは相当に異なるが、80年代以来の社会運動をめぐる苦渋に満ちた反省にたって、国家、社会、運動への身を切るような省察を試みている。とりわけ、本書は、「現代韓国社会論」の副題にあるように、民主化の時代のただ中を生きた研究者自身による、韓国の近代（市民社会）の起原と現在を包括的に論じた、韓国社会の自己分析の書であり、民主化以後の韓国社会と思想をうかがい知るう

(1) 80年5月、朴正熙大統領射殺事件（1979年10月）以後に高揚した民主化運動を封じる五・一七クーデターがあったが、これに抵抗する全羅北道光州市の学生・市民に対して空挺部隊を中心とした戒厳軍が投入され、政府発表でも200人近い死者が出た事件。米軍の指揮下にあった一部軍部隊の移動を米軍が承認したことからその後の反米運動のきっかけともなった。詳しくは、拙書『韓国現代史』（岩波新書、2005年）の第二章参照。

(2) 三八六世代（30歳代、80年代大学入学、60年代生まれ）という言い方が日本でも知られているが、ここではこの世代を中心としつつもやや年齢層を広く（現在40～50歳代）とっていわば「民主化世代」とでも言うべき層を想定している。

えで最適の書であるといえる。

\*

本書は、1996年から2000年にかけて書かれた10本の論文からなっている。おおざっぱにその構成を言えば、韓国の国家と社会の歪みや病理を、国家暴力、家族、道徳、教育、「国民」などを主題に論じた部分（第1章～第5章）と、社会運動や民族主義を中心とする思想状況を論じた第6章～第10章からなっている。

第1章「国家暴力と社会契約——分断の政治社会学」は、韓国の警察・国家安全企画部・保安司令部などの警察情報機関による法を無視した暴行・拷問など暴力行為の蔓延を、分断と冷戦によって特徴づけられる韓国の国家形成の過程にさかのぼって論じたものである。そこでは近代的な法の支配が貫徹されず、社会全体の無規範、さらには近代国家が想定する「契約」の原理の不在が問題とされる。

第2章「韓国『近代』の肖像——五〇年代韓国農村社会における家族と国家」では、植民地支配、分断、朝鮮戦争を経て、家門の名誉と家門・親族の繁栄を第一の目的とする伝統的家族主義に代わって、家族の安定と福利だけを追求する「新家族主義」が台頭したとされ、著者はそこに韓国式「近代」の起点、90年代の韓国市民社会の淵源を見出している。第3章（「韓国の近代性と道徳の危機」）では、道徳の欠如の問題もこの家族主義との関連で論じられ、くわえて1章で論じられた国家の無規範、市場の原則に悖る資本蓄積のあり方が韓国社会全体の道徳の危機を生み出しているとされる。第4章（「韓国の近代性と過剰教育熱——韓国の国家形成と学歴主義の初期形成」）では、50年代に始まる教育熱がやはり家族主義の関連で説明される。さらに、抑圧的な分断体制のもとで、人びとが社会的な抑圧や矛盾のはげ口を高い教育の取得による立身出世に求める以外になかった点

が示される。

第5章「二〇世紀韓国の国民」は、血統主義的「国民」⇒「反共国民」⇒「国民総和」と推移する二〇世紀の韓国「国民」の歪んだ姿が明るみに出され、「左翼」、労働者、女性、在日・在中の僑胞、韓国内の少数民族を排除する「国民」概念の狭隘さが指弾される。

第6章「韓国の近代性と社会運動」では伝統社会から今日に至る各段階の社会運動の類型的な特徴が、韓国の特異な「近代性」との関連で説明される。強権体制下ですすんだ80年代の社会運動は、チリ、ニカラグア、フィリピンなどと同じように第三の社会運動モデルに属し、大学や教会の知識人を主体とするとされる。90年代には、知識人の主導性が衰える反面、「近代克服」を課題とし、欧米の新しい社会運動の性格をも部分的に帯びた市民運動が政治的には未組織の労働運動と並存しているとされる。

第7章「思想の展開をとおしてみた韓国『近代』の姿——自由主義・社会主義・民族主義」は、近代思想の韓国での受容のされ方が検討されるが、韓国での自由主義とは反共自由主義であり、選挙を通じた国民の参加、私有財産の保障以上の意味を持たなかった。80年代に一部知識人や学生をとらえるマルクス主義も、きわめて底の浅い原則論の域を出るものではなく、それらの思想は、けっきょく、民族主義と結合することによってしか生命力を発揮できなかったとされる。

第8章「近代、国際化、韓国の民族主義」では、この民族主義が、植民地期以降、今日の「国際化」の時代にいたる各段階をおって検討される。「国家主義」の下に民族主義を抑制したかつての権威主義体制の頃には、民族主義はこれを批判する進歩的な意味になったが、国際化の時代には、内部の改革と民主化をふまえたより開放的な民族路線が追求されなければな

らない点が指摘される。第9章では、「北朝鮮の民族主義」がスターリン的なそれから、80年代以降、とりわけ社会主義体制崩壊以降「民族第一主義」、「超民族主義・国粋主義的民族主義」に変貌したことが指摘される。すでに述べたように、北朝鮮の「民族第一主義」は、80年代後半には韓国の学生や知識人をもとらえるようになるが、第10章「八〇年代韓国の民族主義——高度産業社会時代の遅ればせの民族主義」では、この点が論じられる。光州事件を経て「外勢放逐」を掲げる反帝（反米）民族主義が台頭するが、これが、同じ時期に台頭した教条的かつエリート主義的なマルクス主義への反発とも結びつく。80年代後半には、「韓国的な情緒・組織方式・人間関係・道徳律にたいしてあらたに関心を抱くようになり、その結果、共同体の団結を強調する民族主義が人々に訴えるようになった」という。80年代後半に高揚した民族第一主義的な統一運動は、学生・知識人、改革的基督教人士・在外韓国人に主導されるが、牧師など宗教者が統一運動の先頭に立った点について「民族という象徴は受難と復活という基督教的信仰体系と符合する面が多」といわれる。著者は、こうして台頭した民族主義、もしくは反外勢統一運動について、「40年以上のマイナスの歴史をゼロに戻す過程」であるが、南北の国民国家の内実についての明確な認識を持ちえていない点に大きな限界があったとしている。

\*

以上、やや強引に本書の概要を紹介したが、実際には論点は多岐にわたり、とてもこの短い誌面でこの本の真価を伝えることは出来ない。取り立てて難解というわけではないが、文体がやや堅苦しく、章によっては（たとえば第6章のように）、主要な論点をつかみにくい部分もないわけではない（もちろん私自身の読み込み不足もあるかもしれないが）。以下、私の読み

取った範囲でこの本の意義を二点に渡って指摘しおきたい。

一つは、韓国文化論や韓国人論では必ずといっていいほど取り上げられる、家族主義、もっと端的に家族愛（兄弟愛、親子愛）の問題である。著者はこれを韓国的近代（市民社会）の歪みの問題、つまり抑圧的で無軌道な国家のあり方と結びつけた、利己的な家族主義（新家族主義）の台頭の問題としてその起原に遡って明らかにしている。そこには、ともすると韓国人の固定不変の本質論の形をとりやすい韓国論や文化論にはない独自の切り口が示されている。とくに50年代の農村での新家族主義の台頭を論じた第2章と、過剰教育熱を論じた第4章が注目される。それは、韓国の知性自身による自省を表わし、一面では日本の軽薄な「嫌韓」派が飛びつきそうな議論でもあるが、むしろそれは近年の「韓流」と「嫌韓」といった対立軸の設定がいかに皮相であるかを物語っているといえる。

それにしても、著者の韓国社会批判は実に厳しい。著者は「過剰教育熱」の問題を反共体制のもとで押し込められた社会的葛藤の捌け口として説明している。「そこには人格の研磨と公益への寄与という意味がふくまれた立身・出世の概念はなくなり、ひたすら弱肉強食の秩序のもとで生存をはかる実用的な「立身出世主義」だけが幅を利かせ」、これが50年代の韓国の大学生の特徴であり、「志向性」であったとも言う。

だが、このような大学生がいかにして、李承晩政権を倒した1960年4月革命の主体たりえたのであろうか。さらに、大学生たちが「道徳共同体」といわれる韓国の社会運動の主体として成長しえた背景や構造とは何か。この点は、運動や社会思想を論じた後続の諸章との整合性にもかかわる重要な論点ともなるだろうが、いまひとつ明確ではない。

この本で注目されるもう一つの論点はなんと言っても民族主義をめぐる著者の見方であろう。そもそも、植民地支配と分断を生きた韓国の知識人たちにとって統一的な民族国家への理念は、いわば、歴史的な宿願であり、ナショナリズムの脱構築や相対化が叫ばれて久しい先進諸国とはかなり事情が異なっている。“民族”にまつわる理念や情緒は、かつて「運動圏」といわれ、いまでは韓国の政界や学界で中核的な位置を占めるようになった民主化運動世代のひとびとに広く共有されているのである。

本書では、80年代後半に心ある知識人や学生をとらえて離さなかった「反帝・反米・自主化民族主義」に対して徹底的な反省が加えられている。とくに第9章と第10章は80年代の民族主義に対する全面的な批判となっていて、この世代の研究者が90年代後半という早い時期からナショナリズムの呪縛から脱して問題を新しい地平で考えようとしていたことを窺わせて注目される。

だが、著者自身、この本の「あとがき」で「私の精神のなかには、情緒的民族主義と論理的近代主義とのディレンマがいぜん解消されないうまま残っている」と、ナショナリズムそのものへの姿勢は微妙である。

80年代の民族主義は「旧植民地民族主義」とか「抵抗的民族主義」とか特徴づけられる、いわば時代遅れのそれであるが、分断体制のもとで民族感情が国家の論理に回収されたり抑圧さ

れたりしてきた韓国では、一度は通るべき熱病であった。しかし、それは「南北朝鮮国民国家の実体」への位置づけを欠き、北朝鮮の「体制正統性確保のための一種の支配イデオロギー」であった、というのが本書で論点である。だが、この本では新しい国際社会に対応する、韓国のナショナリズムといったものが想定できるのか、どうか、あるいは、本書が書かれた以降に、ワールドカップや反米蠟燭デモ（両者とも2002年）、あるいは対日批判の形で噴出するナショナルな感情の大衆的な発露（2005年）を、どのようにとらえるべきかについては示唆されていない。

「統一後のナショナリズムの問題に手を焼いたドイツ」は、国民国家を超える市民的「政治共同体」の構築という文脈のなかで「再三の揺り戻しに遭いながらも『コスモポリタンの転回』とでも言うべき変化を成し遂げてきた」（三島憲一『現代ドイツ—統一後の知的軌跡』岩波新書）といわれる。もちろん、韓国でのナショナリズムをめぐる条件は、国際的にも国内的にも、そういうドイツから程遠く、いまだ韓国の知性たちが向き合わなければいけない難題として残されている。

（金東椿著／水野邦彦訳『近代のかげ—現代韓国社会論』青木書店、2005年9月、413頁、定価3800円＋税）

（ムン・ギョンス 立命館大学国際関係学部教授）